

「海の中道遺跡と万葉集」

（志賀の海人（白水郎）|| 福岡市 ||）

・博多湾頭の右手の突端に握りこぶし状に突き出した島が中国の史書「後漢書」にしるす建武中元二年（57）に、光武帝が「奴（な）」の国王に

かんのわのなのおう

「漢委奴国王」の印を与えたとある国宝「金印」出土地としても著名である。現在、この国宝「金印」は福岡市博物館で保管・展示されている。

・志賀島は博多湾を玄界灘の荒波から守るかのように九州本土から西に延びた砂州「海の中道」（福岡市東区和白町から西方に突き出し志賀島におよぶ細長い砂浜約十二キロの道）によって陸続きとなっている。

・「万葉集地名歌総覧・樋口和也著」によると、「この海の中道の中央、外海である玄界灘に面し、北部九州地方の広域レクリエーションの場である「国営・海の中道海浜公園（福岡市東区大字西戸崎）」内に志賀の海人の拠点と考えられる【海の中道遺跡】があり、この遺跡から志賀の海人の生産活動を示す豊富な資料が出土したとある。

・この【海の中道遺跡】の地は終戦後、米軍基地として使用されていたが1972（昭和47）年に返還され、建設省による公園の建設が具体化したため建設前の1979（昭和54）年〜1981（昭和56）年に福岡市教育委員会は埋蔵文化財調査を実施したところ同敷地内の外海（玄界灘）

に面する砂丘上から古代の集落跡とみられる住居跡と奈良、平安時代の製塩土器および網あるいは釣の錘おもりの類、釣魚に使用する鉄製釣針、ヤス、銚ちやう（もり）としての刺突具、藻刈り用としての鉄製鎌等と魚類の解体、処理の包丁として使われたと考えられる古代の小型の刀、刀子類とうすが出土しており、このことからこの地に志賀の海人（白水郎）の集落があったと考えられるとしている。住民の漁撈活動は「塩焼き」、「藻刈り」、「釣」が主であったのではないかとの趣旨の調査報告がなされている。

・「海人」あま 海で魚や貝をとり藻塩などを焼くことを業とする者。漁夫。

・「白水郎」あま 〓 「白水」はくすい は中国の地名。海人・漁師の異称。

・ 中国の白水に潜水の上手な男がいたことからという。

・「藻塩」あしお 〓 海藻に潮水を注ぎかけて塩分を多く含ませ、これを焼いて水に溶かし、その上澄みうわすを釜で煮詰めて製した塩。

（以上広辞苑等参照）

◎万葉集には、「海の中道遺跡」からの遺物群とよく符合する志賀の海人（白水郎）の生業に関しての次の歌がある。二首とも作者不詳であり、この地でうたわれた民謡であろうとの説がある。

【釣船の網】

しか あま ま あ

志賀の白水郎の 釣船の網 堪

こころ も

へなくに 情に思ひて 出でて
来にけり

卷七—1245 作者 不詳

(解説)

志賀の海人の釣船の引き網が十分に荒波に堪えることができないように私は、心にこらえかねて(妹に会おうと)出かけて来た。

・この歌は「羈旅(きりよゝ旅)にして作る」の中にある一首である。

し か あ ま しほやきころも

【製塩】 志賀の白水郎の 塩焼衣

な

穢れぬれど 恋とふものは
忘れかねつも

卷十一—2622 作者 不詳

(解説)

志賀の海人の塩を焼くときに着る衣のように、なれ親しくなっても恋というものは忘れることのできないものだ。

・この歌は「物に寄せて思いを述べる歌」のなかにある一首である。

しかあま

ほ

【藻刈り】志賀の海人の磯に刈り干

なのりそ

の

す名告藻の名は告りてし

きなにか逢ひ難き

卷十二—3177 作者 不詳

（解説）志賀の海人が磯で刈り干しているナノリソではないが名のつてはいけないのに私は名を教えたのに、どうしてお逢いすることがむつかしいのでしょうか。

・古代において、女性に名を尋ねるといふことは求婚を意味し、名を教えることは求婚を受けたことを指す。

・「ナノリソ」は今のホンダワラヒジキ等

・この歌は「羈旅（きりよゝ旅）に思を發（おこ）す」の中にある一首である。

（写生地）福岡市中心部の近くにある博多港からは真北の海上に博多湾を囲むように西北に細長く伸びる「海の中道」とそれに続く志賀島の景観を望むことができる。

・古代の志賀の海人が住んでいたと推定される集落跡などが出土した「海の中道遺跡」へは福岡市中心部からは「市営渡船」「バス」「JR香椎線」

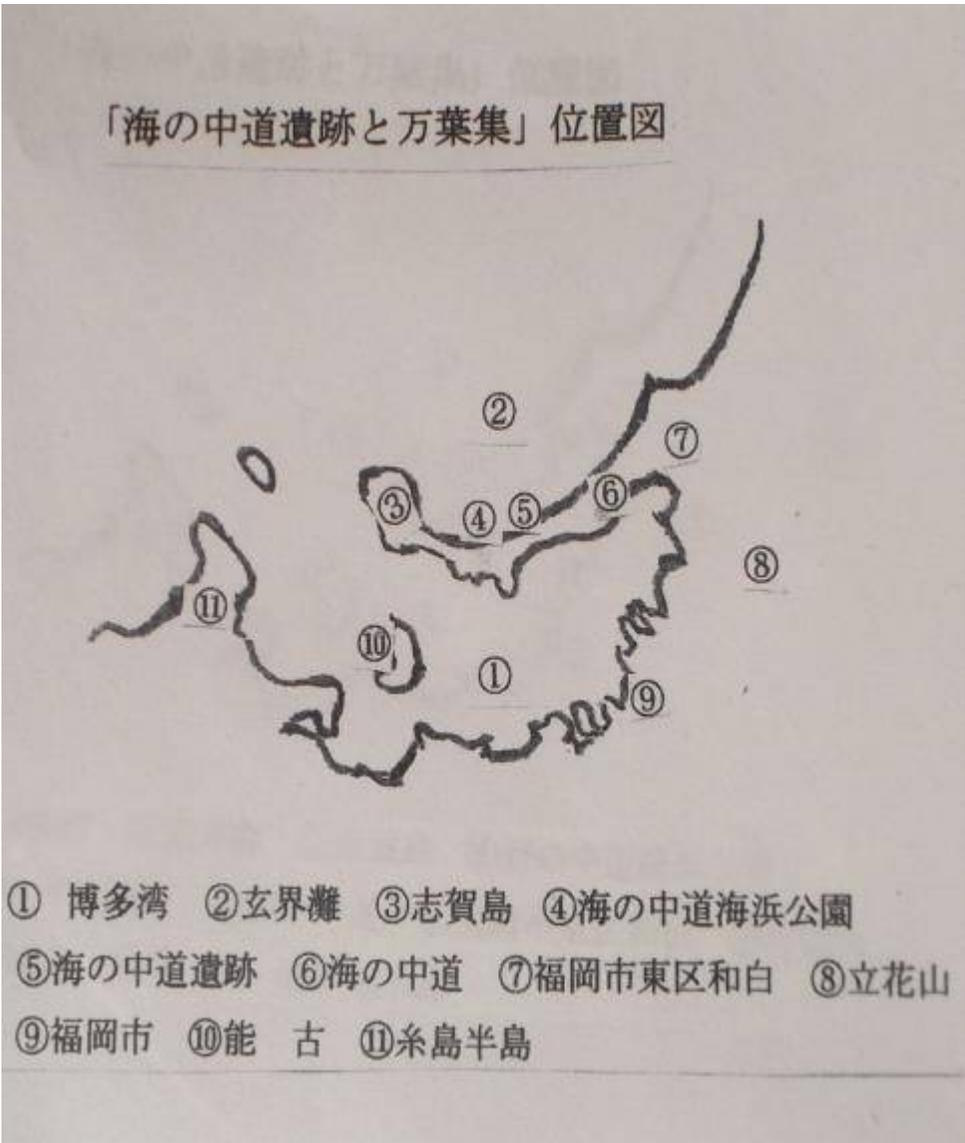
でいずれも1時間余りで行くことができる。

・「海の中道遺跡」は「国営・海の中道海浜公園内」にある。同公園は福岡市東区の博多湾と玄界灘を隔てる半島、通称「海の中道」の中央部に位置しJR香椎線「海の中道駅」のすぐ前に幅0、5〜1km、長さ約6kmの広大な敷地の中に公園、遊園地などのレクリエーション施設を整備すると共に玄界灘に面し海浜地特有のクロマツ林を主体とした海岸線を有し、いわゆる白松青松の砂丘地のすばらしい景観を呈している。

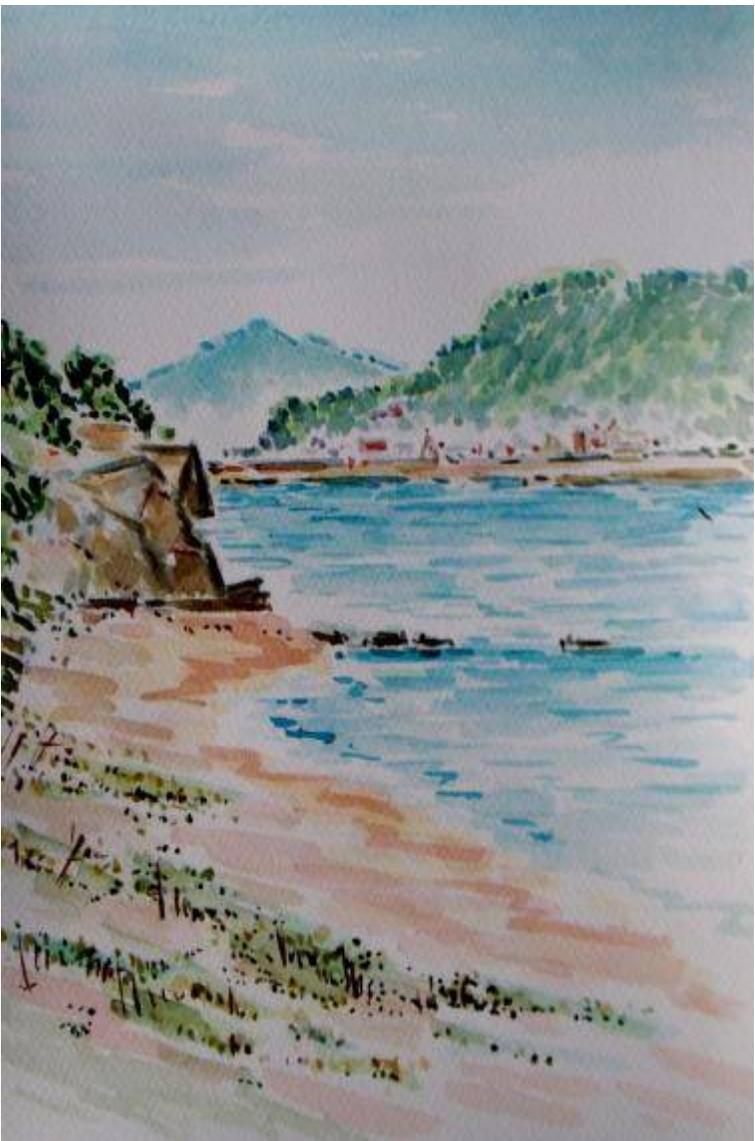
(参考文献)「海の中道遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集(1982年)

「万葉集」日本古典文学大系(岩波書店)「万葉の歌」林田正男著等

・参考【海の中道遺跡関係位置図】



「写生地1」製塩土器、漁具等が出土した海の中道海浜公園内「海の中道遺跡」のあるシオヤ鼻周辺と向側に「志賀島」遠景に糸島半島の山を描く。



「写生地2」シオヤ鼻から玄界灘に面する「海の中道」の海辺と背景に福岡市近郊の山で九州百名山の一つで有名な立花山等を描く。(池田杏花)

